

# ゲルツェンにおける18世紀の遺産

## ——ピョートル一世とフランス革命—— その2

加藤 史朗

### 【その1】目次

はじめに

#### (1) ピョートル一世とフランス革命

- ① カラムジンの遺産
- ② プーシキンの遺産
- ③ 啓蒙絶対主義の遺産

#### (2) 西欧派とスラヴ派論争——18世紀の遺産の正負をめぐる論争

- ① ピョートル一世観とフランス革命観の動揺
- ② 劇薬としてのピョートル一世とフランス革命

#### (3) 二月革命の渦中で——18世紀の遺産に対する幻滅

- ① ロシアへの精神的回帰
- ② ピョートル一世とフランス革命の帰結としての「現代」

#### (4) クリミア戦争の渦中で——18世紀の遺産の再評価

以上は本紀要第34号（2002年）に掲載済み。

### 【その2】承前

#### (5) ロシア国内改革の渦中で ——18世紀の遺産評価における正負の均衡

##### ① 「アレクサンドル二世への手紙」をめぐって

クリミア戦争の渦中でニコライ一世が失意の内に逝去し（1855年）、アレクサンドル二世が即位した。新帝が農奴解放の意志を明らかにすると、ロシアの世論は「百家争鳴」というべき沸騰状態に達し、ロンドンのゲルツェンは、自由な論壇の主宰者としてその中に巻き込まれるようになった。1855年刊行の『北極星』という年誌ではもはや情勢に対応できなくなり、1857年に定期新聞として『鐘』が創刊された。

この時期のゲルツェンの言動の主舞台はこの『鐘』であり、同紙第4号

(1857年10月1日付)に掲載された「アレクサンドル二世への手紙」は、彼をロシア論壇の寵児としたのであった。聴衆は主賓席の皇帝だけではない。その左右両脇のバルコンに居並ぶ西欧派やスラヴ派の「友人たち」であった。従来、これらの「手紙」は、ゲルツェンの「自由主義的動揺」を示すものとして語られてきた。しかし、ここではそうした先入観は捨て、18世紀以来のインテリゲンツィアの精神史の中で「手紙」の意義を検討する。なぜなら、18世紀のヨーロッパでは君主に助言する文学が流行し、スマローコフとエカテリーナ二世の関係<sup>1)</sup>に見られるように、ロシアもその例に漏れなかったからである<sup>2)</sup>。

「手紙」の副題には「コルフ男爵の著作について」とある。コルフとは、1849年来ペテルブルク帝室公共図書館館長の要職にあったモデスト・コルフ男爵(1800-76:72年来伯爵)のことである。「手紙」の眼目は、彼が1857年に刊行した『皇帝ニコライ一世の即位』を批判することであった。この著作の原本は、1848年に当時皇太子であったアレクサンドル・ニコラエヴィチの依頼を受けたコルフがデカブリスト事件を政府の立場から総括し、『1825年12月14日およびそれに先立つ諸事件の歴史叙述』と題して編纂したものである。それは書物の体裁をとってはいたが、皇帝の家族と側近に配布するのが目的であって、製本されたのは25部に過ぎなかった。1854年に『1825年12月14日』と改題して再刊されたが、部数はやはり25部であった。したがって1857年の第三版が事実上初の公刊と言えるものであった<sup>3)</sup>。1857年の夏に約8000部が印刷され、その一部がロンドンのゲルツェンの手元にも届いたのである<sup>4)</sup>。

コルフは当時、農民問題秘密委員会に所属し、前帝に引き続いて新帝の側近とも言える位置にいた。したがって改革が日程に上った時期に、彼がデカブリスト蜂起の鎮定者ニコライ一世を賞賛する書物を公刊したことは、新帝に改革の期待を寄せていた人々を不安に陥れた。とりわけデカブリストの後継者を自認していたゲルツェンにとって、それは許し難い出来事であった。「コルフ男爵の本を前にして黙っていることはできないし、黙っていてはいけなかった。……それは我々を侮辱し、我々を挑発している」(XIII・67)。こうしたゲルツェンの態度は、老デカブリストの一人、ヤクーシキンの心を打ち、ゲルツェンが「自分たちの屈辱をそそいでくれる」という期待を抱かせたほどである<sup>5)</sup>。

ゲルツェンは「手紙」の冒頭で、コルフの書物は新帝の時代に相応しい

ものではないと断言する(XIII・35)。彼が「手紙」で訴えたのは、歴史的  
事実の検証ということではなく、歴史の「見方」についてであった。

ゲルツェンによれば、デカブリストの蜂起はロシア史のピョートル時代  
を締めくくるべきものであり、国家を代表する「皇帝独裁権」と社会を代  
表する「教養あるロシア」の双方がもたらした「極端な帰結」であった。  
ピョートル一世は「規律のない脆弱なルーシ」を「強力なヨーロッパ型国  
家」に作り変えた。「手つかずのまま眠っていた人民の力は、ピョートル  
一世によって覚醒された」のである。強大となったロシアは、全ヨーロッ  
パとの戦い(ナポレオン戦争)で勝利を得ることが出来た。ヨーロッパを  
基盤にして発展してきた「社会」の側も、自らの立場から国家を作ろうと  
しなければならなかった。さもなければ「ピョートル一世の事業は、中途  
半端なものになってしまった」であろうし、「おそるべき愚行に終わって  
しまった」かも知れないからである(XIII・37)。

ピョートル以後の歴史を「国家」と「社会」の二元論的展開としてとら  
える思考様式は、特にゲルツェンに固有のものではなく、当時の知識人一  
般にみられるものであった<sup>6)</sup>。それは18世紀啓蒙思想家以来の伝統的な思  
考様式と言って差し支えない。例えばエカテリーナ二世時代の代表的な文  
学者の一人にエラーギン(1725-1793)がいる。彼はフリーメイソンの影  
響下で、君主制の目的は「神の国」の実現であり、この点から見れば民主  
制よりも君主制の方が優れていると考えていた。また「国家」と「神の国」  
との偏差は「社会」が決めるのだとも言う<sup>7)</sup>。「国家」を代表する皇帝に  
対し、「社会」の代表という自覚に立つゲルツェンは、いわば「18世紀の  
遺産」の継承者であった。ゲルツェンによれば「社会」の充実なくして「国  
家」の真の発展は不可能である。しかるにピョートル改革以来、「社会」  
の発展は停滞したままであった。クリミア戦争において露呈した「国家」  
崩壊の危機はその帰結にほかならない。ゲルツェンは「国家」と「社会」  
の調和のとれた発展を試み、挫折した例として、アレクサンドル一世の啓  
蒙絶対主義とデカブリストの蜂起を挙げる。だがアレクサンドル一世はア  
ラクチャーエフなど君側の奸に取り囲まれ、その意志を徹底できなかつた  
し、デカブリストたちも言論の自由がなかったために、暴力に訴えざるを  
得なかった。言い換えれば、官僚制の重圧の下で「社会」が圧殺されてし  
まったのである(XIII・39-40)。

ゲルツェンはデカブリストの思想そのものを是としたわけではない。彼

らが目指したのは西欧的な立憲制と代議制の樹立であった。その点で彼らの運動はロシアが西欧の国家思想の影響下に発展してきた時代、すなわち「ロシア史のピョートル時代」の掉尾をかざるべきものであった。

ニコライ一世の時代になって「発展の力は外国の形態を移入するなかにはなく、ナロードそれ自体のなかを探り出すことが必要である」(XIII・45、強調原文)という考えが生まれた。「ヨーロッパが、その病床において、悲しくも晩年になって得た最後の秘密をあたかも告白し、遺言するかのよう示していることは……唯一の救済の道として人民の本性の中に——しかもその上、ピョートル大帝のロシアだけではなく、全ロシア人民の本性の中に、強く、深く横たわっている諸要素」である。それゆえに「わが国の発展は、ヨーロッパとは別の道筋に沿って行われる」のだと言う(同上)。

## ② 専制革命論の再検討

『鐘』の成功は、ゲルツェンを「時の人」とした。1858年の初めにカヴェーリンはゲルツェンに宛てて次のように書いている。

「君の影響力は計り知れない。ドルゴルーコフ公爵は、自宅での正餐の席で *Herzen est une puissance.* (ゲルツェンはある種の権力だ)と述べる始末。……一言でいえば、君は大きな権力を掌中にしている。……君が記事を書くたびに、ずっと忘れ去られていた刑事事件が持ち上がってくる。権力は君の『鐘』に脅かされている」<sup>8)</sup>。

ルドニツカヤによれば、「専制革命」論とは「時代の要請、時代の必要性を理解したある特定の個人が、社会の歴史的発展に理性的な方向付けをすることができるという確信に依拠した理論である」<sup>9)</sup>。こうした考え方が生まれた背景にはピョートル一世の「革命」をめぐる議論があった。ピョートルは、フランス革命に比肩する役割を果たしたととらえる見方は、この当時、取り立てて奇矯なものではなかった。すでに本稿「その1」で見たように、それはプーシキン以来の多くの知識人に見られるものであり、チェルヌイシェフスキーなどゲルツェンより若い世代にも認められるものであった<sup>10)</sup>。

「専制革命」への期待は、1848年の二月革命の推移を観察するなかから生まれた。彼は未だ眠っているロシア人民の潜在的な力と皇帝権力が歴史的に果たした役割に注目した。しかし、クリミア戦争の終結に至るまでは、彼の皇帝権力観には、否定的なニュアンスが強い。ロシアは強力な潜在力

をもっているが、皇帝権力は、この力を十分に汲み出す能力をもたない。なぜならそれはロシアの人民（ナロード）に根ざしていない「余計もの」として存在しているからだ。皇帝権力は一時的な独裁であり、統治の原理の基礎に布かれた一種の戒厳令 *осадное положение* である（XII・307）<sup>11)</sup>。ただし留意しておかねばならない点は、皇帝権力 *императорская власть* が、ツァーリ個人と区別されていたことである。1851年の時点では「政府と社会のあらゆる要素が、ツァーリと僧侶を除いてはロシア人民にとって全く異質で、本質的に敵対的なものである」と述べている（VII・285、強調引用者）。すなわちクリミア戦争終結以前の段階でゲルツェンが皇帝権力に対して否定的な態度をとっていた時にも、否定の対象となっていたのは、ルーラーとしての「インペラートル」あり、モライザーとしての「ツァーリ」に対しては慎重な態度をとっていたことが分る。クリミア戦争敗北後の改革時代において、モライザーとしての側面が前面に押し出され、ツァーリの良心に対する信頼と期待がしばしば表明されることとなったのである。1856年3月のパリ講和条約締結直後に書かれ、5月の『北極星』第二号に掲載された論説「前進！ 前進！」では「我々の行く手を阻んでいるのは、ツァーリではなく、農奴制のおぞましき犯罪性なのだ」（XII・310、強調引用者）と記している。

「専制革命」論について考察する場合、その現実的な有効性を示したかに見える内外の情勢にも触れる必要がある。国内的には海軍の革新派が蝟集した『海事論叢』や『ロシア報知』などのリベラルなジャーナリズムによって喧伝され始めた平和的改革路線があった。後にアレクサンドル二世のもとで陸軍大臣を務めるドミトリー・ミリューチンは、早くからそうした路線の支持者であった。彼は当時の日記に次のように記している。

「私は、ただ次のような種類の革命だけを理解できる。すなわち穏やかに、慎重に、人民の必要とすることを適正に判断できる人々の知恵を集めて達成されるような革命である。……人は理性的であることなくして公共の福祉を成功裡に達成することはできない」<sup>12)</sup>。

1848年二月革命の悲惨な結末に動揺した西欧の知識人にあってもこうした見解は共通のものであった。二つの例を挙げよう。一つはロバート・オウエンの場合である。『過去と思索』によれば、オウエンは1852年にゲルツェンと会見した際、ニコライ一世が即位前の1812年にニュー・ラナークを訪問した事実を示し、「専制革命」の可能性を示唆したという（XI・

207-208)。

もう一つの例も同じく『過去と思索』の中に見出される。ゲルツェンは、この中で1854年5月にフランス人の友人エルネスト・クドロワから受け取った書簡を紹介している。書簡でクドロワは、専制権力の可能性に言及し、「ピョートル一世の革命的役割を正しく評価しておいて、なぜあなたは他の誰か、ニコライかあるいはその後継者たちの一人が、ピョートルと同様の役割を果たすべき運命にあるということを認めないのでしょう」と言っている(XI・64)。

ヨーロッパ知識人のこのような「専制革命」への期待は、ヴォルテールやデイドロの啓蒙君主への期待を思わせるものであるが、フランス革命以後の歴史展開を重ね合わせてみると、むしろボナパルティズムへの期待、いわゆる権威国家待望論に近い。だがゲルツェンの場合はそうした権威国家論とは一線を画すものであり、むしろフィロゾーフの伝統を継承するものであった。ゲルツェンは、クドロワとは違い、皇帝権力一般に「専制革命」を期待したわけではなく、専制君主個人の評価が重要なポイントとなっている。この点では、ダーシコワによる「啓蒙専制君主」の評価に近い<sup>13)</sup>。

「アレクサンドル二世への手紙」と題するものには、ここで検討した「手紙」のほかに次のようなものがある。

1. 1855年3月10日付け『北極星』第1巻掲載。
2. 1865年5月25日付け『鐘』第197号掲載。
3. 1866年5月31日付け『鐘』第221号掲載。

しかし、アレクサンドル二世へのメッセージは、「手紙」と題したものだけではない。例えば、『鐘』第2号に掲載された論文「ロシアにおける革命」(1857年7月15日付)はアレクサンドル二世を讀者として想定したものである。論文表題が示すように、まさに彼の「専制革命」論を展開したものであった。エピグラフとして1856年3月、即位して間もない新帝が、モスクワで貴族団代表を前にしておこなった「諸君、このような変化は下からよりも上からなされた方が良いのだ」という有名な演説の一節が掲げられている。

ゲルツェンは、革命と言え、すぐに1789年のフランス革命を想起し、あらゆる変革は、暴力的な大衆蜂起と流血の惨事をともなったものであると連想しがちであるが、それは誤った見方だと言う。暴力革命は革命の一

形態ではあるが、唯一のものではない。かつてロシアにおいては、ピョートル一世が一人で革命をやったし、イギリスの歴史をひもとけば、社会変革が世論の力によって、流血の惨事を回避して達成できるものだという確信が得られる。また最近の平和的革命の具体例を挙げるとすれば、ピエモンテの革命がある。それは「一つの不幸な戦争と政府の側における世論への譲歩とで十分であった」。ロシアにはすでにクリミア戦争という「不幸な戦争」があった。あとは政府が世論に譲歩するだけで十分である。

「職業的革命家 артисты-революционеры が、こうした平和的変革の道を好まないことは分っている。だがしかし、そんなことはどうでも良いことだ。我々にとって確かなことは、ロシアの国家形態の現状が全く不都合なものであり、かつまた流血を伴った発展の道筋よりも平和で人間的な発展の道筋の方を心から望んでいるということなのだ。しかし同時にまた我々はニコライ時代の現状 status quo にとどまるよりは、最も荒々しい、抑制のない発展の方を率直に受け入れるだろう」(XIII・22、強調引用者)。

ゲルツェンは、ロシア自由主義者たちのように、暴力革命を全面的に否定しているのではなく、望ましくないといっているのであり、暴力革命が必要な場合もあり得るという立場を示している (XIV・239)。

彼が「専制革命」に期待した目標は、農奴解放を軸とした農民改革であった。より具体的に言えば、それは、農村共同体を保持しながら、土地付きで農奴を解放するという内容である。「再び古い主題による変奏曲」と題するトゥルゲーネフ宛の書簡体論文の中で、彼は農民改革によって「自由な人民の体制」を育む基盤が出来るのだと述べ、さらに次のように続けている。「私はロシア人民の能力を信じています。秋撒きの芽生えの後に、どんな収穫があるのかが分っているのです」(XII・436)。ゲルツェンにおける「専制革命」とは、「秋撒き」のことであり、それは「社会主義」という収穫を迎えるための過渡的段階なのであった。彼は論文末尾でアレクサンドル二世に次のように呼びかける。

「……陛下はちょうどピョートル帝がモスクワ時代を否定されたのと同じように、率直にペテルブルク時代を否定されることが重要であります。……権力を掌中にして、一方では人民に依拠し、また他方ではロシアのあらゆる思索する人びとや教養ある人びとに依拠するならば、今日の政府は自らにとって最小限の危険さえおかすことなく、奇跡を行うことが出来るでしょう」(XIII・29)。

こうした楽観的な「専制革命」への期待は、1860年頃にピークを迎え、萎えていった。

「1860年」と題する論説の中で「専制革命はロシアをあらゆる無尽蔵の力と未知の可能性が発揮される偉大な発展へと導くことが出来たはずだ。それは一滴の血を流すこともなく、一人の絞首刑の犠牲者も出すことなく、シベリアの道と涙と歯ぎしりの道から富と交易の道へと変えることが出来たはずだ」(XIV・216)と述べている。

### ③ フランス革命の遺産としての第二帝政批判

本稿「その1」の末尾で言及した「フランスかイギリスか」と題するゲルツェンの論文は、クリミア戦争終結後にロシアに急接近したナポレオン三世のフランスに対する危惧を述べ、フランス人に自国の「ペレストロイカ」(文字通りこの言葉を使っている)を呼びかけたものであった<sup>14)</sup>。彼は1858年の3月にこの論文をフランス語で書き、9月になってロシア語訳を小冊子として刊行した。その序言のなかでゲルツェンはフランスを「啓蒙の野蛮人 *варвары просвещения*」と呼び、フランスよりはイギリスの方が百倍も自由だと言う(XIII・230-231)。兵営国家としてのフランスはロシアの良き同伴者ではない。そこでは政治テロの嵐が吹き荒れ、思想とか志というものは無に等しい。

1858年9月にゲルツェンは、マッツイーニの主宰する新聞『思想と行動 (Pensiero ed Azione)』に「皇帝アレクサンドル二世と新聞『鐘』」と題する記事を寄稿している。彼はこの文中で、アレクサンドル二世の性格を分析しているが、外国人を読者として想定しているため、忌憚のない見解となっている。

「アレクサンドル二世は、ツァーリとはいえ、今様のタイプである。綱領を掲げ、序言から全てを始めるといった人物である。彼は宴会の席上、大声で話し演説するのが好み、諸民族間ですぐさま友愛を確立するには、普遍的共和国の理念を宣言するだけで十分だとおめでたくも信じていた少し前の革命家たちときわめてよく似ている。もっとも散文的な人物(ニコライ一世)の息子は……夢想家である」(XIII・337、補足引用者)。

ゲルツェンは、アレクサンドル二世におけるリアリズムの欠如が、国内政策における「不断の停滞」と対外政策における「不断の誤謬」を招いていると論ずる。国内政策においては農民改革の停滞を念頭においているが、

対外政策でゲルツェンを苛立たせていたのは、アレクサンドル二世の親仏政策であった。ナポレオン三世のフランスは、ゲルツェンにとってピョートルとフランス革命の負の遺産を凝縮したエタティスム（権威国家主義）の権化であった。

「ボナパルトのフランス、これは帝政ローマ、すなわち武装した奴隷主の国家だ。そこでは、普通選挙が独裁政治を支え、デモクラシーが市民を平準化する絶対主義となっている」（XIII・339-340）。

#### ④ 改革前夜の論争

改革を目前に控え、ロシアの知識人の間で論争が勃発する。ゲルツェンはその渦中で左右の対立の狭間にあつて両者の衝突を和らげ、平衡を図る働きをした。ゲルツェンとロシア自由主義者の間にはロシア改革に向けての展望において決定的な差異があった。リベラルにとって改革は究極的な目的であったのに対し、ゲルツェンにとって、それは「ロシア社会主義」に至る過渡的な一段階であった。しかし現象面から言えば、農奴制を清算する手段として「専制革命」すなわち「上からの改革」に期待したと言う点で、リベラルに近い位置にいたことは否めない<sup>15)</sup>。その裏付けとなるのは、「アレクサンドル二世への手紙」以降、ゲルツェンに対するリベラルの態度が変化したことである。「編集者への手紙」でゲルツェンを批判したカヴェーリンは、皇后との会食の際、ゲルツェンに話が及ぶと、「彼はロシアを愛していますし、現在の政府に敵対するものではありません」と彼を擁護している<sup>16)</sup>。先に引用したゲルツェン宛の書簡では、「君がコルフの本について皇帝に宛てて書いた最近の手紙は、書写されて広まっております、筆舌に尽くしがたい影響をもたらしている。このようなことは、我が国の文学においてかつてなかったことだ。……君はじきに躊躇なくアレクサンドル二世と手を取り合い、お互いに相手をロシアの安寧と幸福のための同盟者と見なすことが出来るだろう<sup>17)</sup>と述べている。カヴェーリンは、ゲルツェンにロシア国内のあらゆる悪事を容赦なく暴露し、印刷するように求めながら、「皇室についてはもっと慎重に」（強調引用者）と付け加えることも忘れなかった<sup>18)</sup>。『鐘』第1号には、皇太后アレクサンドラ・フョードロヴナの贅沢な西欧旅行が風刺され、農奴制支持者の彼女と皇帝との確執が暴露されていたからである。

しかし、若い世代との間には「暴露文学」と「余計もの」をめぐる論争

が始まる。彼は「暴露文学」と「余計もの」を批判し、否定する若い世代の急進主義を危惧した<sup>19)</sup>。本質論を展開し、原理主義的な言動をとる若者の歴史感覚の貧困に苛立ったのである。

1860年3月1日付『鐘』第64号にゲルツェンの「専制革命」路線を厳しく批判する「地方からの手紙」と題する投稿<sup>20)</sup>が掲載された。「一ロシア人」という匿名の人物は、「専制革命」論はゲルツェンの思想における自家撞着であると難ずる。1853年にゲルツェンは「もし解放が冬宮からもたらされ、皇帝権力が人民の前でその正当性を証明し、われわれを押しつぶしながら、その専制権力を今まで以上に強化するとしたら、それは遺憾なことだ」(XII・84)と述べたことがあった。しかし今では「テムズ河畔からわれわれの耳に届くのは、不正を暴く雷鳴のかわりに、アレクサンドル二世とその夫人に対する頌歌なのだ<sup>21)</sup>。「一ロシア人」は、「上からの改革」は幻想であるとして斥け、「力のみが皇帝権力から人民のための人間的諸権利を奪い取ることができ、勝ち取られた権利のみがあてになる」と断ずるのであった<sup>22)</sup>。

こうした批判に対してゲルツェンがとった態度は、ホッパーのいう「歴史主義」とは対極的な「歴史主義」であった。筆者は先にゲルツェンの「歴史意識と歴史感覚」について論じた際、ゲルツェンにおいては、「歴史は差し迫った思想に不可避的なものとして完全に組み込まれているものであり、しかもそれは、背景としてとか並行する条件としてではなく、最も本質的な側面としてくみこまれているものなのである<sup>23)</sup>というトゥニマーノフの指摘を紹介し、現実には触発され、刺激を受けた彼の歴史感覚は、常に歴史意識の更新をせまる機能をもっていたと述べた<sup>24)</sup>。

改革前夜のゲルツェンにとって歴史に学ぶことはまさに現実的な要請であった。彼は、自由ロシア出版所をロシアと西欧知識人に「フォーラム」として開放する一方、未だ知られざる18世紀の歴史を編むための「アルヒーフ」としても位置づけたのである。特にその役割を担ったのが、『北極星』という定期刊行物であった。『北極星』には、プーシキン、レー尔蒙トフなどの作品やカラージンの「アレクサンドル一世宛の書簡」などの歴史文献を発表した他、のちに『過去と思索』としてまとめられる自らの回想録を掲載した。ロシアの改革が日程にのぼると、現実問題に対する対応という緊急措置が必要になり、定期新聞『鐘』が刊行されるようになったが、アルヒーフとしての機能も同時に強化される。特に1858年には、

『1825年12月14日と皇帝ニコライ』、『シチェルバートフとラジーシチェフ』、1859年には『歴史文集』第一巻、『公爵夫人ダーシコワ回想録』、『女帝エカテリーナ二世回想録』、1860年には『元老院議員ロプーヒン回想録』、1861年には『歴史文集』第二巻がそれぞれ単行本として相次いで刊行された。

現代史を重視するという彼の姿勢は、時代状況の認識と歴史意識に深く関わっている。『シチェルバートフとラジーシチェフ』の序言でゲルツェンは「シチェルバートフ公爵とA・ラジーシチェフはエカテリーナ二世時代のロシアに対する二つの極端な見方を代表している。二つの異なった扉近くに立つ陰鬱な歩哨である彼らは、ヤヌスのごとく相反する方向を凝視している」<sup>25)</sup>と書いた。ラジーシチェフの『ペテルブルクからモスクワへの旅』については、68年ぶりで二度目の出版であり、存在は知られていたかもしれないが、ほとんど読んだ人はいない。ましてやシチェルバートフの『ロシアにおける道徳の退廃について』は、デカブリストたちやプーシキンはおろか、ゲルツェンら後の世代にも全く知られていなかった<sup>26)</sup>。ゲルツェンはいかなる意味で二つの「18世紀の遺産」を公刊しようとしたのであろうか。ヴァリツキが言うように、「専制政治に対する左翼と右翼の批判を向き合わせ……後世のスラヴ派と西欧派による専制批判のアナロジーを見ていた」<sup>27)</sup>のであろうか。こうした解釈の当否はともあれ、時代の要請を認識するなかから、知られざる「歴史」の発掘が意識されていたことは間違いない。

当時のゲルツェンを辟易とさせていたものは、ドグマティズムに呪縛された空論家たちの存在であった。本稿の「その1」で触れた「ロシア自由主義者」もそうした一例であった。「空論」に対抗するには「歴史的現実」を示すことが必要であった。

ゲルツェンにとって「歴史的現実」の出発点はデカブリスト事件であり、18世紀史は、いわばデカブリスト事件の「前史 предыстория」<sup>28)</sup>であった。トゥニマーノフの言を借りれば、ゲルツェンは歴史を常に現代と向き合わせた。しかし歴史を現代的に脚色したり、終末論的観点から歴史を語ったりしない。「ゲルツェンは歴史を《現在において》そしてまた《過去において》大切にしたのである」<sup>29)</sup>。

## (6) 農奴解放後のゲルツェン——幻滅と期待

### ① 「道徳的雑階級人」への期待

ゲルツェンが当初ロシア改革の担い手として期待していたのは、貴族階級出身の知識人であった。1861年の農奴解放令以前には、チェルヌイシエフスキーやドブロリュエボフといった若い雑階級出身の知識人たちの言動を「大変危険だ」<sup>30)</sup>とみなしてきた。また50年代のゲルツェンの著述には、「雑階級人」という用語そのものも見出すことは出来ない<sup>31)</sup>。しかし、60年代に入ると彼はこの用語を独自の解釈で使い始める。ゲルツェンはこの用語を使う際に次のような二点に注目する。一つは「新しいロシア」を目指す戦いにおいて貴族出身の「指導者や闘士」は自らの役割を終え、その代わりに登場したのが「雑階級人」であったという点。もう一つは、当時よく知られていた「雑階級人」という用語に「道徳的 нравственный」という語句を付け加えた点である<sup>32)</sup>。

「雑階級人」という用語がいつから使われるようになったかは、定かではない。しかし、17世紀後半に、「雑階級人 разночинец」に先だって「様々な階層の人々 разночинный люд」という語句が使われ始め、18世紀の50年代になると法令のなかで「雑階級人 разночинец」という言葉が使われていたことが分かっている<sup>33)</sup>。産業革命以前の社会において、基本階級は土地の支配者（貴族）と土地の耕作者（農民）であった。その二大階級に属さない階層出身者のことを「雑階級人」と呼んだのである。

『鐘』160号（1863年4月1日付）から同紙163号（同年5月15日付）にかけて連載した論説「1831年から1863年」においてゲルツェンは、新しい知的な勢力としての「雑階級人」、すなわち「道徳的雑階級人」の登場はベリンスキーをもって嚆矢とすると考える。初めは緩慢な形成過程をたどった「道徳的雑階級人」は、1848年からクリミア戦争期にかけて急速に成長した。専制君主ニコライ一世によるデカブリストの処罰により、ロシアの上層部の人々が打撃を受け、「人々の新しい山脈」がますます市民権を得ていったのである（XVII・101）。また彼は「すべての階層から外れたこうした新しい人々、すなわちこれらの道徳的な雑階級人が作り出しているのは階級ではなく、環境なのだ」（強調原文、XVII・101）と主張し、翌1864年に書かれた論文「ロシア文学の新しい局面」のなかでも「彼らが形成するのは第三身分とか、あるいは何か一般に個別的な階級ではな

く、上からも下からも力を引き出している生き生きとした環境なのだ」(XVIII・217)と述べている。これに対し「閉鎖的な階級としての貴族」は、全くその意義を喪失してしまった。「沈みつつある貴族という船」から下船可能な「唯一の湾」として彼が想定したのが雑階級人という「環境」なのであった(XVIII・348)。

ゲルツェンがここで語っている「環境」とは、かつて彼が「社会」と呼んでいたものと近い。「社会」の中核が貴族から雑階級人へと変わったのである。変わらないのは、「知の共同体」としてのインテリゲンツィアは、脱階層性を特徴とするものでなければならないという点であった。階層や階級的利害を超えた「道徳」こそが重要だからである。まさに18世紀フランス啓蒙主義の遺産ともいえるべき「文芸共和国 *Respublica literaria*, *République des Lettres*」の理念を継承する発想でもあった。

## ② エコロジカルな議論としての「ロシア社会主義」論

ゲルツェン自身が「ロシア社会主義」という語句を意識的に使ったのは、晩年の論文「秩序が勝ち誇っている」(1866年)においてであった。彼は次のように言う。

「大地と農民の生活様式、事実上の分与地とそこで行われている農地の割替え、農村共同体的分与と農村共同体的管理、こうしたものに由来し、そしてまた同時に勤労者のアルテリをもって、社会主義一般が目指し、かつ科学が裏付けている経済的公平を実現しようとしている社会主義のことを、我々は名付けてロシア社会主義と呼ぶのである」(XIX・193、強調原文)。

確かにゲルツェンは、ロシア人民の中に、「社会主義」への可能性が眠っていると再三論じてはいるが、その具体的なプロセスに言及しているわけではない。「ロシア社会主義」は、一種の「即興」だと論ずる研究者もいるほどである。例えばルスラン・ヘスターノフは『アレクサンドル・ゲルツェン：教条主義に対抗する即興主義』と題する近著のなかで、「即興としての《ロシア社会主義》」という一節を設けている。彼は、ゲルツェンにはもともと「ロシア社会主義」を実現する具体的な計画はなかったから、レーニンが「ロシア社会主義には社会主義の片鱗なりとも存在しない。ゲルツェンの《教説》は、《現実を離れたフレーズ》であり、《おめでたい夢想》である」<sup>34)</sup>と言ったのも無理からぬと述べながら、次のように言う。

「ゲルツェンは、近い将来に起こる見込みのなかった真にラジカルな革命をロシア社会主義と結びつけていたし、それが実現しようとしていたのは、政治的な革命というほどのものではなく、社会的な革命あるいはむしろ文化的と言った方がふさわしい革命であった」<sup>35)</sup>。

エレナ・グレフツォーヴァは「文化的な革命」という要素を別の角度から考察する。彼女は、ゲルツェンとコンスタンチン・レオンチェフの文化哲学を比較した著書のなかで、ゲルツェンの「ロシア社会主義」を現代の用語で言えば、「生態学的なもの」と呼んで差し支えないだろうと述べている<sup>36)</sup>。モスクワ大学の物理数学学科出身のゲルツェンが自然科学に造詣が深かったことは、周知の事実である。彼は学生時代に物理学や天文学だけではなく、生物学や動物学にも関心を示していた。生物学と動物学に限って言えば、『自然研究書簡』(1844-46年)とほぼ同時期に書かれた論文「教授ルリエ氏の公開講座」にゲルツェンの観点を見ることが出来る。ルリエ氏の公開講座のテーマは「動物の生活形態と習慣」に関するものであった。

論文は大プリニウスの「自然に無知であることは、自然への忘恩である」というエピグラフから始まる。現代における自然科学の重要性を説き、その知識なくして、健全な知的発達には達せられないと言う。彼はグラノーフスキイと同様に、歴史を「成長する有機体」になぞらえ、「有機的な生命」という自然科学の分野の理念を社会生活に適用して見れば生産的だと考えた<sup>37)</sup>。いわば、「文明の生態史観」<sup>38)</sup>が生まれたのである。

ゲルツェンによる「文明の生態史観」は『向こう岸から』や『ロシアにおける革命思想の発達について』の中でも展開されている。前者ではナロードを自然現象(スチヒーヤ)と見なしており、後者ではロシアの歴史を「スラヴ国家の発生学」として考察している。

「専制革命」への期待が幻滅に終わった後のゲルツェンの立場は、微妙であった。1862年の夏に『鐘』に掲載された「ジャーナリストとテロリスト」と題する論説の中で彼は次のように言っている。「“年老いたロシア”はわれわれのことを、暴力革命の勃発を渴望し、テロリストを唆し、ほとんど扇動に近いことをしていると批判している」(XVI・220)。一方それと同時に「“若いロシア”は、われわれが革命的情熱を失い、“暴力革命に対するあらゆる信念”を失ったと非難している」(同上、引用符原文)。問題となっているのは、農民やポーランド人達の蜂起に対する彼の姿勢であった。そこで彼は自ら「暴力革命」に対する姿勢を明確にすることが必要

であると考えた。彼は次のように言う。「私たちが失ったのは、それら（流血の革命）に対する信念ではない。それらに対する愛情なのだ」と（XVI・221、補足引用者、強調原文）。

1862年から1863年にかけて「終わりと始まり」という書簡体論文が『鐘』に連載された。この論文において彼は自らの「文明の生態史観」を最も詳細に展開している。「終わり」として念頭におかれているのは、ヨーロッパであり、「始まり」とは、ロシアであった。論文全体を通して「始まり」のロシアが「春」という季節に想定され、逆に「終わり」のヨーロッパは、「秋」に準えられている。つまりここでは「ジャーナリストとテロリスト」における「年老いたロシア」と「若いロシア」の対比が、西欧とロシアにおける文明の生態学的対比へと局面を変えて展開される。しかし、それでもなお「終わり」という言葉は、「年老いたロシア」の暗喩ともなっている。

『向こう岸から』が架空の人物との対話であるとするなら、「終わりと始まり」は、トゥルゲーネフという具体的な人物との対話であり、実際の論争を背景にしていた。論文は彼に宛てた八つの手紙という形式をとっているが、論争の進展につれて、相手は、一人トゥルゲーネフにとどまらず、カトコフ、チチェーリン、カヴェーリンといったリベラル西欧派の人々へと広がっていった（XVI・195）。彼らは「学問の作業場、スコラ哲学の工場に属している農奴制を支持する人々」（XVI・146）、中途半端な進歩の理論が、現実の矛盾の悲劇的な複雑さと合わない、「目を閉じてしまう」人々である（XVI・162）。

ゲルツェンがこの論文の全編を通して明らかにしようとした点は西欧文明の行き詰まりということであった。その点について特に生態学的な考察を展開したのが、第3書簡（『鐘』第142号、1862年8月22日付）、第6書簡（同第149号、1862年11月1日付）、第8書簡（同第156号、1863年2月15日付）であった。

第3書簡では、フランス革命の英雄として活躍しながらやがて敗れ去った「革命のドン・キホーテ」について論じ、彼らの現在の姿を「デモクラシーにおける哀れなリア王」になぞらえる。そのジャコバン的言辭は周りの人々を驚かせるだけである。周りの人々は彼の白髪交じりの頭を指さしながら、敬して遠ざかる（XVI・151-152）。生物の発展において、進化してしまった種が衰えて行くように、歴史の発展もやがて停止するか、少なくとも緩慢な動きとなる。国においてはどうか。ある国がその発展の最終

段階に近づけば近づくほど、その国は、シナのように自らが文明の中心であると考えたり、イギリスやフランスのように、自分たちは先進国で向かうところ敵なしだとおもったりする (XVI・155-156)。書簡の結びは以下のようなものである。

「ここでは子供たちが父親より老けており、祖父よりも老人であり、小デユマのように彼らを『放蕩親父』呼ぶことを可能にしている。それは、今を生きる世代の主たる特徴が、老け込みといったことにあるためなのではなかろうか。少なくとも私がどこを見ようとも、至るところで白髪と皺と丸まった背中が目に入る。遺言、総決算、出棺、つまりは終わりばかりが目につくのだ。私はどんなものであれ、始まりにあるものを探してみたが、それらは理論と抽象のなかにしか存在していない」(XVI・157、強調原文)。

第6書簡において、ゲルツェンは自然における生成と発展が一定の法則に従いながらも、個性や独自性を生み出すこともあると見なす。それは人類の歴史にも当てはまることである。「凧の状態の海を見て、一時間後も嵐になることはないと言うことが出来ないのと同様に、例えばシナあるいは日本がこれから何世紀も今のままの孤立し閉ざされ、停滞した状態を続けると確信をもって主張することは出来ない」(XVI・173-174)。けれども彼は生命体には終りがあると言う。

「ゲルマン＝ラテン世界は、光栄ある1789年の後に続いた雷鳴と暴風の中で終わりを告げた。フランス革命という地震は頂点とどん底、勝利とテロル、部分的な断絶と大変動という激変を繰り返し1848年まで続いた。そこでアーメン、nec plus ultra (ご臨終)である」(XVI・176、強調原文)。

第8書簡はポーランドにおける一月蜂起(1863年)の直前に書かれた。書簡の中では、ゲルツェンを訪ねてきた客人が、これまでの『終わりと始まり』が若者たちに悪影響を与えているからこうした言論活動に終止符を打つべきだという。

「われわれロシア人は、言語的にも人種的にもヨーロッパの家族、すなわちヨーロッパ人種 genus europaeum に属している。従ってまさに生理学の不変の法則によってヨーロッパと同じ道を歩まねばならない。カモ科に属するカモがエラで呼吸するなんて話は聞いたことがない」(XVI・195、強調原文)。

これに対し、ゲルツェンは、生理学の不変の法則を是とし、もしロシア

がヨーロッパの家族の一員だとしても、どうしてラテン人やゲルマン人が作ったのと同じ発展の道を歩まねばならないのか、そんな一節は生理学の本にもないだろうと言う。発達全体図は、予め知る事の出来ない無数のヴァリエーションを排除するものではない。発生的に同じだからと言って、伝記が同じとは言えない (XVI・195-196)。ゲルツェンは西欧文明の行き詰まりを象徴しているものとして、メシチャンストヴォ (プチ・ブルに近い意味をもつ。本稿その1参照<sup>39)</sup>) の支配をあげる。彼によれば、ロシアもメシチャンストヴォの段階を通過するかも知れない。しかしそれはまさに可能性の一つにすぎないのであって、別の可能性もあると言う (XVI・196)。

「自然の中にも生命の営みの中にも、新しい動物の種や新しい歴史の運命や国家の形態を予防したり、阻止したりするためのいかなる独占も手段も存在しない。それらに制限を設けることは不可能というしかない。未来は過去の主題によって即興曲をつくるのである」 (XVI・198)。

## (7) 晩年——国家の肥大化とテロルへの嫌悪

### ① ナロードへの回帰

論説「ジャーナリストとテロリスト」における「ジャーナリスト」とは、「解放の餌食」や「大砲の餌食」となっている民衆についてわれわれに解説している「年老いたロシア」に属する人々のことである。一方「テロリスト」とは、「若いロシア」の一部に見られる「血の渴望に取り憑かれ、敵の頭蓋骨で酒を飲もうとする」人々である (XVI・222)。いずれの場合も、人民を国家の犠牲に供している点では変わりがない。これに対してゲルツェンは「分権化がわれわれの革命の第一条件である。……われわれには公布すべき新しいドグマや新しいカテキズムは存在しない。われわれの革命は人民の生態に、すなわち人民の分別によって認められた諸原理、長年に渡って培われてきた習慣に自覚的に戻ることから始まるに違いない」 (XVI・222-223) と述べる。

晩年のゲルツェンの言動に一貫しているのは、近代国民国家形成過程における「道徳の退廃」に対する批判であった。その際、とりわけ批判の的となったのが、近代化の過程で大きな役割を果たしたブルジョア文化や思想であった。「人権」や「福祉」はおろか「デモクラシー」さえ批判の俎

上に載せられた。農奴解放直後に書かれた「解放の餌食」(『鐘』第121号、1862年2月1日付)と題する論説には、こうしたゲルツェンのレトリックが端的に表されている。彼は自分たちを批判する人々を「ロシアの空論家や進歩的な保守主義者たち」、「せっかちさのゆえに権威を求めるとても幼い人々や用意されたパンを欲しがるとても怠惰な人々」(XVI・25)と皮肉った上で、彼らは人民のためと言いながら人民を自己実現のための手段にしてきたに過ぎないと断ずるのである。

「……人民の背後で考え出され、斧と鞭によって民衆にその不可譲の権利とその福祉を押しつける啓蒙や解放の方法は、ピョートル一世とフランスのテロルで使い果たされた。……革命の偉大な根本思想は、哲学的内容とかその政令のローマ風スパルタ様式の飾りとはかかわりなく、警察・異端審問・テロルへと急速に逸脱していった。人民の自由を打ち立て、人民を大人扱いすることを望みながら、緊急性を口実にして人民を福祉の材料として、解放の餌食 *мясо освобождения* として、まるでナポレオンの大砲の餌食にするかのように、公共の福祉の餌食 *chair au bonheur public* にしたのであった。……独自の騒々しさ、独自のおしゃべりの背後で、人権の善良なる地区警察官や自由・平等・友愛のピョートル一世たちは、長い間、人民という主君が語る事に耳を傾けてこなかった」(XVI・27-28)。

「解放の餌食」という用語は、「大砲の餌食 *chair à canon*」というフランス語を起源としている。この表現は、もともとはシャトーブリアンが「ボナパルトとブルボン家」という著述のなかで、兵卒を惜しげもなく砲火の犠牲に供しているナポレオンに対して使った非難の言葉である<sup>40)</sup>。ゲルツェンはこの言葉から「公共の福祉の餌食 *chair au bonheur public*」という語句<sup>41)</sup>に至り、さらに農奴解放後のロシアの状況に対して「解放の餌食 *мясо освобождения*」<sup>42)</sup>という表現を用いたのである。

西欧文明を批判する際に、ゲルツェンのレトリックは際だってくる。例えば、論文「立憲政という名の種痘」(『鐘』第195号、1865年3月1日付)では、「立憲政」を一種の「種痘」に譬え、種痘の跡は「バラの花のように一日だけ生きた。朝に咲き、夕方には萎れてしまった」と述べ、次のように言う。

「我々は貴族の系譜書に記載され、元老院紋章局に登録されているズヴェニゴロドの、モジャイスクの、あるいはその他のすべての貴族たちの試みに決して反対するものではない。彼らは害を及ぼし得ないし、寡頭政に

基づく立憲政は可能である。数日間ではあるが、アンナ・ヨアノヴナの時にそうであった。もちろん今は違う。もし西欧風な発展をたどっているすべての国民が貴族的な立憲政の段階を通過せねばならないとするなら、われわれは早くそれを済ませてよかったといわねばならない。種痘をした後のように数日間は自重するほかない。そうすればもとの自分の道にもどるからである」(XVIII・317)。

## ② 18世紀への回帰

ゲルツェンは1865年9月1日付の『鐘』第203号に掲載された「旅行者への手紙」(第6書簡)のなかでフランス革命以降の動きを総括して、次のように述べている。

「革命は、二つの帝政に至る道からも、二つの王政復古に至る道からも外れて進展することは不可能であった。社会的な課題の大きさが革命を停止させ、革命に対する異常なまでの人民の態度が、先進的な少数者を麻痺させたのであった。事態が政治上の諸権利にかかわるものである間は、知識人は皆、運動の近くにいた。事態が社会問題にかかわり始めると、新しい分裂が生じた。……論理と運動を信じようとしている人々もいるにはいたが、大衆は知識人を用無しにし、知識人はその反体制的言辞にもかかわらず、気がつくやうに、保守派になっていた。以前には革命家たちがその後見人を務めていたところの人民は、再びローマ教皇の手に落ちるかあるいは卑しい生活苦の枠の中に身を閉じ込めたのであった。人民を擁護した人びとは、人民の野蛮なる無知を後ろに隠すようにして脇に退いたのである。そこに我々が見たのは、山の頂きに立つ数名の預言者と山の下で重苦しい眠りを貪っている人民大衆であった。前進することには恐怖がつきまとう。さりとして退くことは不可能であった。新たに生じたことは信頼にたらないものとなった。待機し、和解し、必要なものも不必要なものも支え、獲得したものを守り、新しいものをはねつけねばならない。こうした問題の状況にとっては、帝政の単純な独裁制、専制君主制の分りやすいディスポテリズムの方が、立憲君主制よりも自然なのだ」(XVIII・382)。

ゲルツェンは、革命が帝政や王政復古へと収斂していく過程を「社会問題」から考えようとしたのであった。社会問題とは「大衆」が「パン」を求める圧力にはほかならない。この圧力のもとで革命は、帝政すなわち専制への道を辿ったと言うのである。1868年の「我々は戦争に賛成なのか？

Som mes-nous pour la guerre?」の中では、その点についてもっと端的に述べている。

「フランス革命はおごそかに人間の権利を宣言して始まり、プレリアールのパンを！ パンを！ という不吉な叫び声とともに終わった。人民は国民公会からパンを得られないことがわかると、王政が復活したのだ」(XX・99)。

フランス革命が国家の肥大化をもたらしたとするなら、ロシアでそれを行ったのはピョートル革命であった。「ロシア文学の新局面」(フランス語版『鐘』第44号、1864年5月25日付)で次のように論じた。

「ピョートルは受動的なナロードを有する強力な国家をつくろうとした。彼はロシアのナロードを軽蔑していた。愛していたのは彼らの数量と力だけであった。彼は現在の政府がポーランドで行っているよりも桁外れの規模でナショナルな諸原則を抑圧したのであった」(XVIII・175)。

最晩年になるにつれ、彼は西欧文明の帰結に絶望感を深めた。バクーニンに宛てた書簡体論文「古い友への手紙」(1869年)で彼は「教養ある人々が、アッチラ、公安委員会、さらにはピョートル一世さえをも許して来たということは、我々には認められないことである」と述べる一方で「我々は宿命を遂行するようと、上から我々に呼び掛ける声を耳にしたことはなかったし、また下から道を指し示すような地下の声もまだ耳にしていない。我々には一つの声、一つの力が存在するだけである。それは理性と理解の力である」と続けている(XX・588-589、強調原文)。

以上の引用は、ゲルツェンがその生涯の最期に至るまでその評価をめぐる悩み苦闘し続けた最大の「18世紀の遺産」がフランス革命であったことを明らかにする。

ゲルツェンは1868年2月にミシュレに宛てて次のように書いた。

「この秋、私は上の娘とともに、君の革命史を読み返してみた。1月21日の箇所から最後まで。ああ、何という作品だろう。これは最も詩的で、最も気高いフランス革命史だ。あまりに率直に言うからといって、怒らないでほしい。ダントンや彼の友人の死について書かれた最後の部分を読みながら、泣いてしまった」(XXIX(1)・271)。

ゲルツェンは、最晩年に至るまでフランス革命について、関心を持ち続けた。彼の死後、次女オリガ(1850-1953)が夫として選んだのは、後にフランス革命史研究の権威となるガブリエル・モノーであった。

## おわりに

ゲルツェンの生涯は、フランス革命によって生まれた「単一にして不可分の共和国」が「帝国」として肥大化してゆく歴史過程のなかにあった。この帝国化の過程は二段階のプロセスをたどった。初めはナポレオン・ボナパルトによる第一帝政への段階であり、この段階の末期を飾る事件がいわゆる「ナポレオン戦争」であった。ゲルツェンが生まれたのはまさにその当年、1812年であった。この過程は一旦挫折し、ロシアなど旧勢力によるウィーン体制の確立によってアンシャンレジームの復活が成功したかに見えた。だがしかし市民革命と並行して進行した産業革命はアンシャンレジームの基盤を確実に堀崩していった。ゲルツェンが西欧に亡命したのは、ウィーン体制が風前の灯火となっていた1847年であった。翌年の二月革命によってウィーン体制は終止符を打たれ、帝国化の第二段階が始まる。それは一国史的レヴェルで言えば、ナポレオン三世の第二帝政成立に至る動きであるが、世界史的に見れば、帝国主義の時代への過程であった。リベラリズムが後景に退き、ナショナリズムが台頭した。国益（ナショナル・インタレスト）が第一義的なものとなり、個人原理は全体性のなかに埋没していった。ゲルツェンが生涯をかけて格闘したのが、こうした歴史過程であった。これを思想史的な視点から見るとどのような意味があるのだろうか。

啓蒙主義の遺産は、フランス革命を経て近代市民社会の中に受け継がれたというのが、一般論である。しかしゲルツェンはそうした「18世紀の遺産」の継承に異議を唱えた。18世紀の啓蒙思想は、神秘主義やロマン主義のフィルターを通して体系化され、グランド・セオリーを生み出して行く。ゲルツェンが若い時に「革命の代数学」として夢中になったヘーゲル哲学やその後のマルクス主義などは、まさにその典型であった。しかし、ゲルツェンは歴史的現実の具体的なプロセスに立ち会う度に、体系化された思想やそれが唱える「普遍的価値」に疑義を抱いた。18世紀啓蒙思想の成果としてフランス革命と並び称されるアメリカ独立革命についても同断であった。

アメリカは「年老いたヨーロッパが夢想してきた全てのもの」すなわち共和制やデモクラシー、あるいは自治といったものを獲得したが、これらから一体何が生まれたのか。「社会の多数者は独裁的な警察権力を獲得し

た。国民自身がニコライ一世の役割、秘密警察や刑吏の職務を遂行しているのだ。80年前に《人権》を宣言した国民は《鞭打つ権利》をめぐって分裂しようとしている」(『過去と思索』第6部第9章、XI・226-227)<sup>43)</sup>。

ゲルツェンは勿論、南北戦争前夜のアメリカについて腑分けしているのだが、メスはその部分だけにとどまらず、市民社会や大衆社会全体の「病巣」まで摘出する。

「国民が政府の干渉から解放されていればいるだけ、また言論の自由や良心の独立がより多く認められていればいるだけ、大衆というものは、それだけ不寛容になり、世論は拷問部屋となる。諸君の隣人、諸君の肉屋、諸君の仕立屋、家族、クラブ、教区は諸君をいつも監視していて刑事の職務を代行する。およそ内面的自由への能力を持たない国民が、はたして自由な諸制度を作り出すことが出来るだろうか」(XI・227、強調原文)<sup>44)</sup>。

こうしたペシミズムのなかで、ゲルツェンは18世紀啓蒙思想の原点に回帰しようとした。18世紀の啓蒙思想の遺産としての個人原理をもう一度見直そうとしたのである。前出のガブリエル・モノーは「ゲルツェン氏は、多くの点で18世紀の我が国の偉大な人々、とりわけデイドロに似ている」という証言を残している<sup>45)</sup>。

## 注

- 1) Г. А. Гуковский, *Русская литература XVIII века*, М., 2003, стр. 126-129.
- 2) Cynthia H. Whittaker, *Russian monarchy: eighteenth-century rulers and writers in political dialogue*, Northern Illinois University Press, 2003, pp. 3-12を参照。
- 3) モデスト・コルフ編・山本俊朗訳『秘史デカブリストの乱——ニコライ I 世の即位』(恒文社、1982年刊)、2頁。О. Д. Голубева, *М. А. Корф*, СПб., 1995, стр. 84. 拙論「ゲルツェンとロシヤ自由主義者」(『史観』第107冊、昭和57年、247-264頁)参照。
- この時期に出版することになったのは、アレクサンドル二世の強い働きかけがあったからだとしてコルフは証言している。Н. Я. Эйдельман, *Герцен против самодержавия*, М., 1973, стр. 35-36.
- 4) *Там же*, стр. 37.
- 5) *Летопись жизни и творчества А. И. Герцена*, 1851-1858. М., стр. 361-362.
- 6) В. А. Китаев, *От фронды к охранительству—Из истории русской либеральной мысли 50-60х годов XIX века*, М., 1972, стр. 86 и след.
- 7) К. С. Максимов, *Народовластие и монархия в историческом труде И. П.*

- Елагина, Сб. «*Монархия и Народовластие в культуре просвещения*», М., 1995, стр. 51.
- 8) *Литературное наследство*, т. 62, М., 1955, стр. 385–386.
- 9) Е. Л. Рудницкая, Н. П. Огарев в русском революционном движении, М., 1969, стр. 104.
- 10) Franco Venturi, *Roots of Revolution*, (First published in Italy, 1952), English version, 1966, pp. 138–139.
- 11) ここで述べられている言葉は、1853年、ポーランド蜂起23周年を記念する集会でゲルツェンがおこなった演説の繰り返しである。しかし若干の異同が見られる。演説ではペテルブルクの帝政 Петербургское императорство となっていたのが、ここでは単に、皇帝権力 императорская власть となっている (XII・129)。
- 12) E. Lampert, *Sons against Fathers: Studies in Russian radicalism and revolution*, Oxford, 1965. p. 80.
- 13) ウィタカーによれば、ダーシコワなど18世紀の知識人は、国家安寧の基礎は君主個人の性格であると考えていた。その点で、ダーシコワは、ピョートル一世を「啓蒙専制君主」ではなく、暴君と見なす。С. Уиттейкер, Е. П. Дашкова и её идея самодержавия, «*Екатерина Романовна Дашкова: Исследования и материалы*», СПб., 1996, стр. 65–67.
- 14) 拙論「ゲルツェンにおける18世紀の遺産——ピョートル一世とフランス革命——その1」、愛知県立大学外国語学部『*紀要*』(地域研究・国際学編)、第34号、2002年、125頁。
- 15) Т. И. Усакина, Статья Герцена «*Very dangerous!!!*» и полемика вокруг «облитительной литературы в журналистике 1857–1859гг.», -Сб. «*Революционная ситуация*», 1960, стр. 260.
- 16) К. Д. Кавелин, *Собр. соч. в 4 томах*, СПб., 1897–1900, т. 2, стр. 1174.
- 17) «*Литературное наследство*», т. 62, М., 1955, стр. 386.
- 18) Там же.
- 19) 「暴露文学」をめぐる論争については、拙稿を参照。「余計もの」をめぐる論争については、エゴロフの次のような評価が当を得たものと言えよう。「歴史的に言えば、ゲルツェンは同時代の「余計もの」の評価において正しくなかった。彼はニコライ時代の物差しではかったからである。一方、チェルヌイシェフスキーとドブロリュエボフは過去の「余計もの」たちの群像を評価する上で誤っていた。彼らは現代の物差しで彼らをはかったのである。」  
Б. Ф. Егоров, *Борьба эстетических идей в России середины XIX века*. Л., 1982, стр. 119.
- 20) 投稿の筆者は一時期チェルヌイシェフスキーと見なされていたが、ネチキ

ナはドブロリューボフだという。

М. В. Нечкина, Н. Г. Чернышевский в годы революционной ситуации. -(К анализу источные темы), «Исторические Записки», 1941, т. 10, стр. 28 и след.

- 21) Колокол: Газета А. И. Герцена и Н. П. Огарева, Вольная русская типография, Лондон-Женева, 1857-1867, Факс. Изд., Вып. 3, Л. 64, М., 1962, стр. 533.
- 22) Там же.
- 23) В. А. Туниманов, А. И. Герцен и русская общественно-литературная мысль XIX в., СПб, 1994, стр. 156.
- 24) 拙稿「ゲルツェンにおける歴史感覚と歴史意識」、愛知県立大学外国語学部『紀要』(地域研究・国際学編)第32号、2000年3月、168頁。
- 25) О повреждении нравов в России князя М. Щербатов и Путешествие А. Радищева, Лондон, 1858. (Фак. изд., М., 1984), стр. v.
- 26) Н. Я. Эйдельман, Об издании Вольной русской типографии «О повреждении нравов в России князя М. Щербатова и Путешествие А. Радищева с предисловием Искандера». Его же, Свободное слово Герцена, М., 1999, стр. 419.
- 27) A. Walicki, *The Slavophile Controversy—History of a conservative utopia in nineteenth-century Russian thought*, Oxford, 1975, p. 20.
- 28) Н. Я. Эйдельман, Указ. соч., стр. 419.
- 29) В. А. Туниманов, там же.
- 30) ゲルツェンは『鐘』第44号(1859年6月1日付)に文字通り「Very dangerous!!!」と題する論説を書いている。ネチキナによれば「地方からの手紙」はそれに対する反論でもあったと言う。Нечкина, Указ. соч., стр. 29 и след.
- 31) См. Г. Н. Вульфсон, Термин «разночинец» и его толкование Н. П. Огаревым и А. И. Герценом, Сб. «А. И. Герцен, Н. П. Огарев и общественное движение в Поволжье и на Урале», Изд. Казанского унив., 1964, стр. 64.
- 32) Там же, стр. 65.
- 33) Там же, стр. 53.
- 34) В. И. Ленин, Памяти Герцена. Пол. соб. соч., 4-ое изд., т. 18, стр. 10.
- 35) Р. Хестанов, Александр Герцен: импровизация против доктинь, М., 2001, 308-309.
- 36) Е. С. Гревцова, Философия культуры А. И. Герцена и К. Н. Леонтьева, М., 2002, стр. 84.
- 37) Там же, стр. 52.
- 38) 梅棹忠夫『文明の生態史観』からの借用である。ロシアで生態史観と言えばダニレフスキーが有名であるが、彼の場合、自然科学的な決定論というべ

## ゲルツェンにおける18世紀の遺産

きものである。ゲルツェンの場合は、多様な文明が共存するという点で、梅棹に近い。梅棹の比較文明論は、西田哲学にあった文化の「多元性」と、それを生物学に活かした今西錦司の「棲み分け」理論をふまえ、生態学をモデルにして人間共同体生活様式の変化を考えたのである。彼はこの変化を遷移（サクセッション）と呼び、オートジェニック（自成的）なサクセッションの地域とアロジニック（他成的）なサクセッションの地域に分類する。梅棹忠夫『文明の生態史観』（中公文庫、昭和49年）参照。

- 39) 拙論「ゲルツェンにおける18世紀の遺産——ピョートル一世とフランス革命——その1」、128頁の注34参照。
- 40) А. М. Бабкин, В. В. Шендецов, *Словарь иноязычных выражений и слов, употребляющихся в русском языке без перевода в двух книгах*, т. 1, стр. 240–241.
- 41) *Там же*, стр. 241.
- 42) ドルイジャコワは、この論文でゲルツェンが念頭においていたのは、バクーニンだと言う。Е. Н. Дрыжакова, *Герцен на западе*, СПб., 1999, стр. 137.
- 43) アレクサンドル・ゲルツェン著、『過去と思索』第3巻、金子幸彦・長縄光男訳、筑摩書房、1999年、241頁参照。
- 44) 前掲書、241–242頁参照。
- 45) Л. Р. Ланский, *Герцен и Франция*, «Литературное наследство» т. 96, стр. 303.

## Наследие XVIII века в творчестве А. И. Герцена: Петр I и Французская революция

Сиро КАТО

Родившийся в Москве в год наполеоновского вторжения и закончивший свою жизнь в Париже за год до провозглашения Парижской Коммуны, Герцен (1812–1870) всегда находился в гуще исторических событий, но и с головой бросаясь в водоворот Февральской революции 1848 года, он не оставлял изучения истории, к чему его подталкивала неумная жажда знаний. Особый интерес для него представляла история XVIII века — «колыбель современной истории». Находясь в ссылке в Лондоне, Герцен основал Вольную русскую типографию, получившую известность в связи с выпуском периодических изданий «Полярная звезда» и «Колокол», в которых публиковались революционные воззвания, но помимо них в типографии были также напечатаны многие исторические источники XVIII века, которые не могли быть изданы в это время в России. Историческое чутье подсказывало Герцену, что в действительности вся история «сфабрикована», что любая история является по сути историей современности. Но, учась у истории, Герцен отрицал надуманные исторические аналогии как «насилие истории», не говоря уже об основывающихся на «исторических законах» детерминизме и фатализме.

Среди исторического наследия XVIII века внимание Герцена особенно привлекали два события: революция Петра и Французская революция. Обращение к этим двум ключевым понятиям позволило ему рассмотреть историческое наследие XVIII века и разворачивающиеся события истории века XIX в динамике. В конечном итоге ему удалось сформировать реалистичный, выходящий за рамки своей эпохи взгляд на обе революции с их положительным и отрицательным наследием. Благодаря своему историческому чутью, которое позволило ему уловить в историцизме «насилие истории», Герцен сумел обнаружить и «общую болезнь» обеих революций. Эта болезнь, вызванная обеими революциями, которые породили логически взаимосвязанные империю и республику, заключалась в гипертрофированном преувеличении роли

государства. Для Герцена, считающегося основоположником идей народничества, «народ» олицетворял «естественность» в противоположность искусственности концепции государства. Отмечая 200-летие Французской революции, исследователи стали выделять такие ее характерные черты как «жертвы» и «радикальные средства». В статье «Мясо освобождения» историческое чутье позволило Герцену в пессимистическом, но вполне реалистическом ключе предсказать возможность исторического перехода от Французской революции к Русской.